

センカンの歌——沖浦恵子さんの思い出

池田知隆

赤道直下のインドネシア・スラウエシ（旧セレベス）島。その南部の山あいにあるテンペ湖の湖岸にセンカンという町がある。いまでも日本人が訪れることはほとんどない。この湖岸のアパダホテルでの一夜の光景がふと記憶の底から浮かんできた。そういえば、私は沖浦恵子さんのことを戦後五十年の記録として新聞記事を書いていたのだ。

「ミスター・ハツガノが見つかりましたよ。この写真の人よ」

恵子さんが日本から持参した写真をホテルの女性経営者、ムダリジャさんに差し出し、語りかけた。「えっ、本当ですか」。ムダリジャさんは絶句し、半世紀ぶりを見る若き日本人将校の顔に懐かしげに見入っていた。

一九九五年十一月十五日のこと。写真の主はすでに他界していたが、二人の心は一瞬にして戦時下の少女時代に飛び、合唱を始めた。

真白き富士の けだかさを

こころの強い 楯として、

戦時中によく歌われた「愛国の花」(福田正夫作詞、古関裕而作曲)だ。一九三七(昭和十二)年にラジオの国民歌謡として作られ、渡辺はま子が銃後を守る婦人の思いを桜、梅、椿などにたとえて歌っていた。二人の歌は最初から最後まで歌詞は正確で、よどみがなかった。

御国につくす 女等は、

輝やく御代の 山ざくら、

地に咲き匂う 国の花

恵子さんがムダリジャさんと初めて出会ったのは、その八年前にさかのぼる。夫の沖浦(和光)先生と毎年のようにインドネシアを旅していた恵子さんがここに宿泊し、歓迎の宴の席でムダリジャさんが「愛国の花」と「日の丸行進曲」などを歌いだした。そして目を細め、懐かしそうに語りだした。

「戦争中、私の家に陸軍のミスター・ハツガノという日本の将校が投宿していたの。とっても可愛がってもらったわ。母は彼を義理の息子にしていたのよ。ずっと音信不通だけど」

この島では激しい戦闘はなく、戦争は終わり、ミスター・ハツガノは去った。「戦後、郡長だった父はオランダからの独立戦争で亡くなり、兄弟はゲリラに殺された」とムダリジャさん。その後、自宅を

スラウエシ ホテルの女性経営者

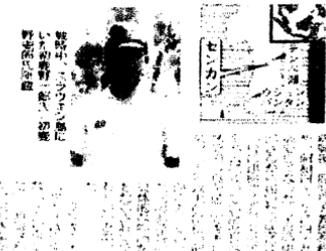
懐かしい「ハツガノ」 日本人将校の身分かる

インドネシア

スラウエシ、ハツガノの街に、日本人将校の身分をかる。ハツガノは、スラウエシの中心街にあり、かつては日本人将校の身分をかる。ハツガノは、スラウエシの中心街にあり、かつては日本人将校の身分をかる。ハツガノは、スラウエシの中心街にあり、かつては日本人将校の身分をかる。



初瀬野村の字義を見るムアンティさん（右）との撮影



野村中、スラウエシ
いぬ野村中、スラウエシ
野村中、スラウエシ

スラウエシ、ハツガノの街に、日本人将校の身分をかる。ハツガノは、スラウエシの中心街にあり、かつては日本人将校の身分をかる。ハツガノは、スラウエシの中心街にあり、かつては日本人将校の身分をかる。

「朝日新聞」1995年12月20日

ホテルに改造し、独身を通してきた。

戦争でインドネシアにやってきた日本軍は現地の人の「教育」に重点を置いた。日本軍は三年間で約十万人ものインドネシア人に教育し、それが「義勇軍」の活動、ひいてはインドネシア独立に役立つ

た。現地の小学校の日本人教師は日本兵が担い、「愛国の花」は、日本兵が望郷の思いに堪えきれずに歌っていたのをインドネシア人が自然と覚え、広がっていったという。(その後、スカルノ初代大統領がこの歌を好み、自ら作詞して「ブンガ・サクラ(桜の花)」となった。スカルノは戦いの先頭でこの「愛国の花」を独立運動の心として歌ったのだろうか。)

「愛国の花」も「日の丸行進曲」も日本人には侵略者として後ろめたさを伴う軍歌だが、ムダリジャさんにとっては懐かしい青春の歌だった。日本ではすっかり忘れられていた一日本兵が彼女には美しい記憶として刻まれていた。

「彼は英語がうまく、すごきだった。そのとき二十五歳。いつも馬に乗っていたわ」と語るムダリジャさんは可憐な女学生の面影を漂わせていた。敗戦前のころは、恵子さんは八歳か九歳、ムダリジャさんは五歳上だから十四歳くらいときだ。何度か会うたびに「ハツガノはマダムの初恋の人ではないかな」と恵子さんはハツガノ探しを始めた。

東京の電話帳から調べてみると、「初鹿野」の名が三軒あった。沖浦さんが緊張しながら最初に電話した初鹿野さんがまさしくミスター・ハツガノの家だった。

「父は確かにセレベスに行っていました」——電話の向こうから伝わってくる子息の声はやさしく丁寧だった。

ハツガノとは初鹿野一郎氏。東京帝大英文科卒業後、陸軍で兵役し、セレベスへ。終戦後、鹿兒島大教授を務め、昭和四十二年に四十九歳で亡くなった。子息の史郎さんから届いた手紙には「母に連絡す

ると、父のアルバムに残っていたセレベスでの写真を送ってきました。二十年以上前に私の前から去っていった父のある時の具体的な物語がもたらされてうれしい」とあった。

「ミスター・ハツガンは亡くなっていました」

恵子さんが、史郎さんからの手紙を英訳して手渡すと、ムダリジャさんは「これまで仕事第一に生きてきました。あなたの思いやりに満ちた心がとてもうれしい」と感慨深げに語っていた。

この夜のことは、恵子さん自身も『忍冬』の何号かに書いていたと思う。沖浦先生を中心にトラジャや南スラウエシを回ったこのインドネシアの旅は楽しかった。そのうれしさのあまりに調子に乗り、バリ島のホテルでの別れの宴で「私、歌います」と立ち上がった。音痴もいいとこ、調子はずれの悪声なのはいうまでもない。曲目は「さよなら皆様」。タカラヅカで終演時に流れる美しい曲だ。

「さよなら、皆様、さよなら、ごきげんよう」

葬送儀礼をめぐるトラジャでの体験、センカンでの現地の人との温かい交流……など感動の連続にいつしかセンチメンタルな気分になっていた。それは「天国」を旅したようでもあり、「劇場」の中にもなるようでもあった。私の横で一見、元タカラヅカスターのような美しい恵子さんも確か、静かな声で「楽しい思い出、心に秘めて」と口ずさんでいた。私の歌がみんなの失笑をかうことはわかっていたし、私が自ら率先して人前で歌ったことはそれっきりない。

沖浦先生と恵子さんとの旅の思い出は尽きない。あれから二十三年経った。天国に先立った沖浦先生、そして恵子さん、天国でまた会うその日まで、どうかごきげんよう。

■ 著者紹介

沖浦恵子 (おきうら やすこ)

1934年、和歌山県新宮市に生まれる。

1956年、青山学院大学卒業。東京都大田区立大森第八中学校勤務。

1961年、大阪に転居。

2018年、死去。

[非売品]

インドネシアを愛して—沖浦恵子文集

2018年12月1日 発行

著 者 沖浦恵子

編集・発行 沖浦恵子さんを偲ぶ会実行委員会

〒565-0803 吹田市新芦屋下 28-18 寺木伸明方

TEL・FAX 06 (6877) 5715

装 丁 森本良成

印 刷 モリモト印刷株式会社
